

公立か私立か パートⅡ —2006年 PISA 調査の結果より—

門 間 麻 紀

1. はじめに
 2. 分析の前提
 3. 高校間の学力差
 4. 家庭の経済力と学力
 5. おわりに
- 参考文献

1. はじめに

3年毎に行われる国際的な学力到達度調査、PISA (Programme for International Student Assessment) の第3回調査結果が2007年12月に公開され、新聞紙上を賑わしたことは記憶に新しい。PISA は世界各国の15歳児を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの三分野にわたって学力を調べるもので、2006年の調査には OECD 加盟30カ国、非加盟27カ国から約40万人の15歳児が参加した。毎回、三分野のうちの一つが中心分野として特定され、その分野に関してより細かいデータがとられるが、2000年の第1回調査では読解力、2003年の第2回調査では数学的リテラシー、最新、2006年の調査では科学的リテラシーが中心分野となっている。

日本では、主に他国との学力の比較、という側面から PISA の調査結果が議論されることが多く、2006年調査の結果についても、日本の生徒の学力が低下傾向にあること、特に、2006年調査の中心分野である科学的リテラシーの平均スコアが参加国中6位と、前回の2位に比べて低くなったことに議論が集中しているようである。しかし、データを注意深く観察すると、科学的リテラシーの平均得点で3位のカナダが534点、日本が531点、と、その差が僅かに3点であることが分かる。その一方で、11位の韓国と日本との差も9点しかなく、カナダから韓国までの平均得点の差は統計的に有意ではないことが、調査結果報告書[2007]にも述べられている。調査への参加国が、OECD、非OECD 諸国を併せて第1回目が32カ国、第2回目が41カ国、今回が57カ国と増加している点も考え合わせると、順位だけを見て一喜一憂するのはあまり意味がないだろう。一方で、見逃されがちな

のが、PISA では単に学力を調査するだけではなく、生徒自身、その家族の社会経済的状況、そして生徒の通う高校の状況についての詳細かつ多様なデータが同時に収集されている、という点である。これらのデータを学力のデータと併せて分析することにより、日本の教育全般に関する様々な特徴、及び問題点を探ることができる。

門間[2006]は、2003年 PISA の調査結果をもとに、日本における高校間、特に公立高校と私立高校の間の差異を、生徒の学力、学校に対する意識、学校の環境、家庭の環境の面から比較し、世間一般の認識とは異なり、平均的に見れば公立高校の生徒の学力の方が高く、設備の面で見ても公立高校の方が整っていること、私立高校の場合は、中高一貫教育をしている学校の生徒の学力が高いが、中高一貫教育をしている私立高校と公立高校の生徒の学力の間には統計的に有意な差は見られないこと、生徒の家庭の社会経済的状況と平均学力の間には一定の関係があること、などを議論した。本稿では、これらの解析結果を踏まえて、2006年の調査において公立高校と私立高校の間の関係に経年変化が見られるか、見られるとしたらどのような方向に向かっているのか、について、分析を行う。なお、学校の環境については、3年でハード面がそれほど変わるとは考えにくく、また、生徒の学校に対する意識については今回、データが取られていないため、分析は生徒の学力と家庭環境に限定して行う。

2. 分析の前提

2006年において、日本全国に存在する高等学校は5385校であり、このうち国立が15校、公立が4045校、私立が1325校である。比率に直すと公立対私立でほぼ3:1ということになる。一方、日本における2006年の PISA 調査参加校のうち、公立高校は133校、私立高校は52校であり、調査参加校の中での公立対私立の比率は2.56:1で、バランスとしてはまずまずと言える。ただし、不参加校についての情報は提供されていないため、データの偏りの可能性について踏み込んだ議論をすることはできない。なお、PISA 調査に参加した私立高校のうち16校は中学校を併設、残り36校が高校単独の学校となっている。日本では、厳密には高校ではなく学科を単位として調査を行っているが、ここでの議論に影響を及ぼすことはないと考えられるため、本稿では特に高校と学科とを区別しない。

PISA のデータを分析するに当たっては、いくつかの技術的な点に留意する必要がある。まず、第一は、PISA における標本抽出方法が単純無作為抽出ではなく層化抽出法をとっており、高校、日本の場合、正確には学科をクラスターとして標本が抽出されていることである。データを収集する立場からは、予算や時間に制限がある中でこの方式を取るのは当然であるが、同一学校内の生徒の間には正の相関があるため、各生徒のデータを独立、同一分布に従うものとして扱うことはできない。また、調査当日の欠席者や調査への不参加校の問題などもあり、生徒ごとに同じウェイトを

用いてデータを分析することができない。標本分散の計算に当たっても Balanced Repeated Replication (BRR) 法などを用いて修正標本分散を計算することが必要になる。

第2の留意点は、テストそのものである。PISA 調査は釣合い型不完備実験計画方式を取っており、調査に参加したすべての生徒はテスト問題の一部だけを解くように設定されている。どの部分を解くかも生徒によって異なっており、生徒のスコアをそのまま生徒の学力とすることはできない。PISA では、生徒の学力を連続分布に従う潜在変数として捉え、この分布をまず推定し、そこから生徒の学力の推定量である Plausible Values (PV) を各分野5個ずつデータとして提供している。その分析に当たっては、生徒個人について推論するのではなく、集団についての推論をすることが必要になる。これらの点についてのより詳細な説明は、PISA Manual[2003]を参照されたい。なお、本稿で分析しているすべてのデータ、及び分析のためのマニュアル、主なマクロは PISA のウェブサイトで公開されている。

3. 高校間の学力差

公立高校に通う生徒と私立高校に通う生徒の間に学力の差はあるだろうか。2003年の PISA 調査の結果と比較しながら見ていく。既に述べたように、PISA 調査における標本の選び方は複雑であるため、データの分析に当たってもそれに対応した方法をとることが必要になる。各生徒の学力に関しても、テストの点数そのものではなく、生徒の学力の推定値である Plausible Values (PV) がデータとして提供されており、平均学力を求める際にも単純な算術平均をとる訳にはいかない。各生徒のウェイト（1人の生徒が母集団の生徒何人分を代表するものか）も一様ではなく、分析の精度は、生徒数ではなく、標準誤差で判断する必要がある。

表1は、数学的リテラシー・読解力・科学的リテラシーの三分野それぞれについて、生徒の平均学力を公立・私立高校別に表したものであり、カッコ内は標準誤差を表している。この表から、2003年の調査同様、すべての分野において公立高校の生徒の平均学力が私立高校の生徒のそれを上回っていることが見てとれる。ただし、その差は2003年の調査時よりは小さくなっており、公立校と私立校の生徒の平均学力の差は、数学的リテラシーと科学的リテラシーの分野においては5%有意水準で統計的に有意であるが、読解力については有意ではない。この点は、すべての科目において、公立高校の生徒の学力が私立高校の生徒の学力より有意に高かった前回とは異なっている。標本誤差について見ると、前回同様、私立高校の値の方が大きく、私立高校の間での学力の学校間格差の存在を示唆している。2時点間の比較だけで長期的傾向について議論することは得策ではないが、表1、及び2003年の対応する結果からは、少なくともこの3年間に学力面における公立高校の優位性は強まっていない、ということが言えるであろう。

表1 公立私立別平均学力

高校	数学	読解力	科学
公立	528.2 (3.21)	501.47 (4.25)	536.63 (3.64)
私立	511.69 (7.47)	490.09 (6.69)	519.7 (6.64)

私立高校の間での学校間格差についてより詳細に分析するために、中学を併設している私立高校と高校単独の私立高校の間で平均学力がどうなっているかを示したのが表2である。高校単独の学校に比べて中学併設校の生徒の方がどの分野の平均学力も高く、その差はすべての分野において、5%有意水準で統計的に有意である。さらに、表1と併せて見ると、私立の中学併設校に通う生徒の平均学力は公立高校の生徒の平均学力をも上回っており、両者の学力差も、すべての分野において5%有意水準で統計的に有意である。つまり、平均的にみると公立高校の生徒の学力は私立校の生徒の学力を上回っているが、中学併設の私立高校生に限って比較すると、その傾向は逆転する。この点は、中学を併設している私立高校の生徒と公立高校の生徒との間に顕著な学力差が見られなかった2003年の調査との大きな違いである。

表2 私立高校の平均学力

高校	数学	読解力	科学
私立 中学あり	558.36 (10.54)	542.05 (10.75)	569.7 (9.00)
中学なし	495.77 (10.23)	472.36 (8.92)	502.6 (8.98)

中学併設の私立高校に通う生徒の学力が高いことが中高一貫教育の賜物なのか、それとも中学、或いはそれ以前の小学校や幼稚園の段階において入学者選抜によって選ばれた生徒だけを受け入れた結果によるものなのかは、このデータからは判断できない。普通科高校と専門(職業系)学科高校における教育の内容の違いなども要因として考えられるだろう。いずれにせよ、私立高校の中で中学を併設している高校とそうでない高校との平均学力の間に無視できない差があることは事実である。

高校間の学力差を別の角度から見るために、三分野のそれぞれについて平均学力の上位20校、及び下位20校中、公立、及び私立高校がそれぞれ何校入っているかを記したのが表3である。2003年の調査においては、すべての分野において、上位20校中、私立校は僅か1校ずつ、しかも同一校が入っていたに過ぎなかったのに対し、今回の調査では数学で4校、読解力では5校が上位20校に

入っている。一方で、下位20校の中に入っている私立高校の数は2003年に比べて減少しており、ここからも私立高校の学力が前回に比べて相対的に高くなっていることが分かる。しかし、標本全体に含まれる公立校の数は133校、私立校は52校で、ほぼ2.6：1の割合であることを考えると、上位校に占める私立高校の数はまだ、割合以下であるということになる。また、各分野で上位20校に入った私立高校のうち、科学的リテラシーの上位校は中高一貫ではなく、高校のみの学校である。さらに、読解力の上位私立5校中、中学併設校は2校、数学の上位私立4校中、中学併設校は1校のみであり、ここから、中高一貫教育をしている私立高校は平均的に見ると学力は高いものの、いわゆるトップ校という位置づけでは必ずしもないことが見てとれる。その一方で、下位校に入っている私立高校はすべて高校単独の学校である。こうした中、2006年調査の中心分野であった科学的リテラシーにおいて、私立高校が上位20校中1校しか入っていない点は興味深い。私立高校は、いわゆる大学受験のための教育に力を入れており、英数国3教科中心型の勉強になっているせいで科学的リテラシーの点数が比較的低くなっているのか、たまたまそういう結果になったただけなのか、より詳細な検討を加える必要がある。

表3 上位校・下位校に占める公立・私立高校数

高校		数学	読解力	科学
上位20校	公立	16	15	19
	私立	4	5	1
下位20校	公立	15	15	14
	私立	5	5	6

表4は、各分野における生徒の習熟度を、レベル別に表したものである。PISA では、生徒の習熟度を数学と科学的リテラシーについては7段階、読解力については6段階の水準に分けており、レベル1未満が最低の習熟度を示している。中学併設の私立高校の場合、各教科において、最高水準に所属する生徒の割合は公立校とそれほど差がないが、それに続く4、5レベルに属する生徒の割合が公立高校を大きく上回っていることが特徴的である。また、レベル1未満、及びレベル1に属する生徒の割合は極度に少なく、選ばれた生徒の集団であることを示唆している。中学を持たない私立高校の状況はこれと逆で、水準の低いところに学生が集中している。数学を例にとると、1未満～3までの習熟度レベルに属する生徒の割合は、公立高校で29.4%、私立の中学併設校では14.5%しかいないのに対し、高校単独の私立高校では実に45.6%と半数近くに上っている。逆に、4～6の習熟度レベルに属する生徒の割合は、公立高校で44.3%、私立の中学併設校では過半数の57.9%であるのに対し、私立の高校単独校では29.7%と三割にも満たない。科学的リテラシーに関してもほぼ同様の結果である。読解力はレベル数が他の分野と異なるため注意が必要だが、やはり

中学併設私立高校におけるレベル1未満、及びレベル1といった習熟度の低い水準に属する生徒数の少なさと、逆にレベル4に所属する生徒の多さが際立っている。私立の中学併設校は、特筆に値する学生が多い、というより全体的に中の上の学生が多く粒が揃っている、というところであろうか。これに対し、一部の私立の高校単独校は、他に行き場のない生徒の受け皿になっている可能性がある。

表4 習熟度別生徒の割合

数学的リテラシー							
高校	1未満	1	2	3	4	5	6
公立	3.5	8.1	17.8	26.3	25.2	14.0	5.2
私立 中学あり	0.6	1.9	12.0	27.7	32.3	20.3	5.3
私立 中学なし	6.5	14.5	24.6	24.7	16.4	9.7	3.6
読解力							
高校	1未満	1	2	3	4	5	
公立	6.6	11.0	21.2	28.4	22.3	10.4	
私立 中学あり	0.5	3.8	16.2	33.8	32.2	13.5	
私立 中学なし	9.2	15.9	26.4	26.7	16.2	5.6	
科学的リテラシー							
高校	1未満	1	2	3	4	5	6
公立	2.9	8.0	17.6	27.3	27.7	13.4	3.1
私立 中学あり	0.2	2.2	10.8	29.7	35.9	18.5	2.7
私立 中学なし	5.1	13.1	24.0	27.9	20.5	8.2	1.3

(%)

高校間の学力差の要因としてまず考えられるのが入学時の選抜であるが、それ以外にも学力差をもたらすものはあるだろうか。生徒の1週間の学習時間について、国・数・理の教科毎に、学校の正規の授業、正規以外の授業（補習・塾）、自分の学習時間（自習・宿題）をまとめたのが表5である。どの科目についても、明らかに中学併設の私立高校の正規授業時間数が多い。年間に直すとかなりの時間数の差になり、この差が学力に与える影響は無視できないものがあるだろう。数学に関しては、正規の授業以外の授業、自習・宿題の両面においても中学併設の私立高校生の学習時間が多くなっている。これに対し、理科・国語に関しては、正規以外の授業時間数は、公立高校、中学併設私立高校、高校単独私立高校ともに大差ない。自習・宿題の時間についても数学ほどの差は見られない。なお、本論からややずれるが、いずれの科目についても自習・宿題を全く行わない生徒がこれほど多くいる点は憂慮すべきである。

表5 1週間の学習時間

	全くない	週に2時間未満	週に2時間以上4時間未満	週に4時間以上6時間未満	週に6時間以上	無回答・無効
数学 正規の授業						
公立	0.1	8.2	36.3	41.9	12.7	0.8
私立 中学あり	0.1	1.7	21.0	52.4	24.4	0.4
私立 中学なし	0.5	9.6	36.8	38.8	13.6	0.7
数学 正規以外の授業						
公立	63.5	23.0	9.9	1.8	0.8	1.0
私立 中学あり	48.2	29.0	17.5	2.8	1.6	0.8
私立 中学なし	62.0	25.0	9.6	1.9	0.9	0.6
数学 自習・宿題						
公立	25.7	47.0	18.1	5.0	3.2	0.2
私立 中学あり	12.7	50.9	24.3	8.3	2.8	1.0
私立 中学なし	27.9	49.2	18.2	3.3	1.0	0.4

	全くない	週に2時間未満	週に2時間以上4時間未満	週に4時間以上6時間未満	週に6時間以上	無回答・無効
理科 正規の授業						
公立	3.2	24.9	62.6	8.0	0.7	0.7
私立 中学あり	0.7	9.0	59.1	27.6	3.2	0.4
私立 中学なし	7.0	20.4	56.0	13.6	2.3	0.6
理科 正規以外の授業						
公立	81.9	13.5	3.4	0.3	0.1	0.9
私立 中学あり	82.1	13.4	3.7	0.4	0.0	0.4
私立 中学なし	81.2	14.5	3.1	0.5	0.0	0.8
理科 自習・宿題						
公立	46.3	47.1	4.9	0.8	0.2	0.7
私立 中学あり	37.5	54.5	6.6	0.8	0.0	0.7
私立 中学なし	46.6	45.6	6.2	0.9	0.1	0.5

	全くない	週に2時間未満	週に2時間以上4時間未満	週に4時間以上6時間未満	週に6時間以上	無回答・無効
国語 正規の授業						
公立	0.3	8.2	50.9	35.4	4.4	0.9
私立 中学あり	0.3	2.4	40.2	45.0	11.7	0.4
私立 中学なし	0.4	5.8	46.0	41.0	6.2	0.5
国語 正規以外の授業						
公立	73.3	18.9	5.4	1.0	0.2	1.1
私立 中学あり	73.5	18.9	6.4	0.6	0.0	0.6
私立 中学なし	71.4	20.8	5.3	1.4	0.3	0.8
国語 自習・宿題						
公立	36.1	49.7	10.8	2.1	0.5	0.8
私立 中学あり	33.2	55.8	9.4	0.8	0.1	0.6
私立 中学なし	38.9	49.7	9.1	1.3	0.6	0.4

(%)

成績に関する意識はどうであろうか。表6は、各科目について、良い成績をとることが重要か否かを生徒に聞いた結果をまとめたものである。この表からは、成績に対する生徒の意識には公立、私立の中学併設校、高校単独校でそれほど大きな差がないことが分かる。むしろ、科目ごとの差の

方が大きい。理科の成績を重要と考える生徒が、他の二科目と比較して少ないのは、受験と関係があるのだろうか。数学・国語に関しては、ほぼ9割の生徒が、良い成績を取ることが重要と答えており、意外なほど真面目な一面をうかがわせている。

表6 成績に対する生徒の意識 ―良い成績をとることはどれくらい重要か―

科目	高校	とても重要である	重要である	あまり重要でない	全く重要でない	無回答・無効
理科	公立	23.7	43.5	26.3	5.3	1.3
	私立 中学あり	31.5	41.6	21.0	5.7	0.2
	私立 中学なし	24.6	41.1	26.9	7.0	0.3
数学	公立	49.7	36.4	9.5	3.0	0.0
	私立 中学あり	58.9	30.0	7.5	3.4	0.2
	私立 中学なし	51.1	35.2	9.6	3.8	0.3
国語	公立	48.1	38.4	9.9	2.3	1.3
	私立 中学あり	51.5	35.4	10.3	2.6	0.2
	私立 中学なし	50.9	38.4	7.7	2.7	0.3

(%)

4. 家庭の経済力と学力

家庭の経済力と学力との関係については、2003年調査から経年変化が見られるだろうか。PISAで定義されている家庭の社会経済的背景の指標を用いて学力との関係を調べる。PISAで用いられている家庭の社会経済的背景の指標は、親の職業を国際的に50がほぼ平均になるように数値化したものであり、父・母共に職業を持っている場合は、両者の指標のうち、より高い値をその生徒の家庭の社会経済的背景の指標と定義している。全体的に見ると、公立高校生の家庭の社会経済的背景の平均値は48.9、私立高校生の平均は53.2と2003年の調査時とほぼ変わりなく、私立高校生の家庭の方がやや高い値を示している。私立高校の中でも中学併設校に通う生徒の家庭の社会経済的背景の平均値は57.1と2003年に比べて3ポイント上昇しているのに対し、高校のみの私立に通っている生徒の社会経済的背景の平均は51.9と0.9ポイントの増加に留まっている。ここから、中学から私立高校に子供を通わせている家庭は総じて豊かであり、そうでない家庭との経済力の差は前回に比べて開いている、ということが言える。

社会経済的背景指標と生徒の各分野の学力との相関係数の値は表7のようになり、これについても2003年の調査から大きな変化はない。いずれの分野に関しても、相関係数の値はほぼ0.2と、関係が強いとは言えず、同じ程度の経済力を持った家庭の生徒の間でもかなり学力のばらつきがあることが分かる。

表7 家庭の社会経済的背景指標と学力の相関係数【個人レベル】

高校	数学		科学		読解力	
	相関係数	標準誤差	相関係数	標準誤差	相関係数	標準誤差
公立	0.21	0.16	0.18	0.16	0.18	0.18
私立	0.22	0.31	0.21	0.35	0.19	0.32

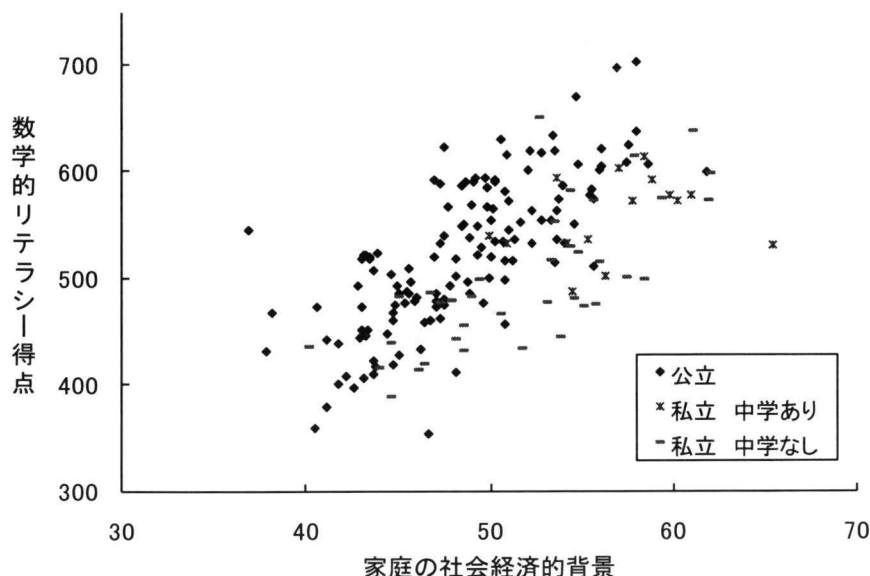
上の結果は、しかし、そのまま学力と家庭の経済力との関係を否定するものではない。そのことを端的に示しているのが、公立・私立校別に社会経済的背景指標の値によって生徒を四分分割し、それぞれのグループごとに数学的リテラシーの平均点を求めた表8である。この結果も2003年調査とほぼ同じ傾向を示しており、社会経済的背景指標の値が高いグループの方が、平均的に数学の学力が高いことが分かる。公立・私立校生ともに、社会経済的背景指標の値が高い生徒ほど平均学力が高い傾向があることは事実である。

表8 家庭の社会経済的背景と数学の平均学力

	公立	私立
I	506.6	474.7
II	522.2	510.9
III	539.9	533.4
IV	557.6	535.2

さらに、学校単位で見たときの数学的リテラシーの平均スコアと家庭の社会経済的背景指標の平均値とを散布図に表したのが図1であり、2003年調査時と同様、家庭の社会経済的背景と数学の得点は正の相関を示している。また、家庭の社会経済的背景指標の平均値がほぼ同じである高校同士を比べると、中学併設の有無に関わらず、公立高校の数学の平均点が私立高校よりも高い（図の上方に位置している）ことから、同じ経済力を持った家庭を比較すると、公立高校に通う生徒の方が総じて学力が高い、ということが言える。なお、数学的リテラシーの平均点と家庭の社会的経済的背景指標の平均値との相関係数は、公立高校、私立の高校単独校ともに0.73と、個人単位で見たときに比べて遥かに強い正の相関を示している。一方で、私立の中学併設高校の相関係数の値は0.28に過ぎない。散布図からも、経済力のある家庭の子供が、中学、ないしは小学校から私立校に通い、高い学力が身に付いている、という単純な構造には必ずしもなっていないことが見てとれる。もっとも、私立の中学併設校の調査参加校数は16しかないため、これらの数字から何らかの結論を出そうとするのは早計であろう。総じて、家庭の経済力と学力の関係は、2003年調査時とあまり変化がないと言える。

図1 学校単位での数学的リテラシーと家庭の社会経済的背景の関係



5. おわりに

PISA の調査結果については、諸外国に対する相対的位置づけという視点から語られることが多いが、日本国内における学校間関係を見ることによっても、現在の教育が抱えている様々な問題点を発見することができる。2006年の PISA 調査の結果を見ると、2003年と比べて私立高校の学力が相対的に上昇しているが、その中で中学併設の私立校と高校単独の私立校との差が広がっていることが分かる。もともと日本の学校間格差は国際的に見てもかなり大きく、それが拡大していることは問題である。しかも、中学併設の私立高校の生徒が比較的高い得点を得ているという事実は、子供達が高校入学以前の中学校、小学校、遡って幼稚園入学の時点で振り分けられている可能性を示唆している。あまりにも早い時点での振り分けは、後から伸びる能力を秘めている子供達の成長の芽を摘むことにならないだろうか。

このような学力格差の背後には学習時間の差が存在することが、データより歴然としている。特に、高校の正規の授業時間数は学校間で大きな隔たりがある。このことは、裏を返せば、生徒の学力向上の一番の近道は、単純に学習時間を増やすことだ、ということをも指している。また、成績に対する生徒達の意識は学校間でほとんど差がないのに、個人の実際の学習時間にかかなりの開きがあることは、生徒達が周りの環境に影響されやすいことを示している、とも考えられる。周りの者が勉強していれば自然と勉強せざるをえない心境になるだろうし、周りが遊んでいるときに一人で勉強するのは大変なことである。授業や補習・宿題を通して、学校が生徒を勉強させるべく毅然と

した姿勢を示すことが、学力向上には欠かせないだろう。

現在、公立校では、小中一貫教育に向けての動きが加速している。この動きが、中高一貫の私立高校と同じような教育効果をもたらして、学力向上へのきっかけになるのか、その成果が待たれるところである。

参考文献

1. 国立教育政策研究所編 [2007] 『生きるための知識と技能(3)―OECD 生徒の学習到達度調査(PISA) 2006年国際結果報告書―』 ぎょうせい
2. 国立教育政策研究所監訳 [2007] 『PISA 2006年調査 評価の枠組み』 ぎょうせい
3. 門間麻紀 [2006] 「公立か私立か―2003年 PISA 調査より―」 『経済論集』 第32巻 1 号, pp103-118.
4. OECD [2005] PISA Data Analysis Manual 2003:Spss, OECD, Paris
5. OECD [2007] PISA 2006:Science Competencies for Tomorrow's World: Volume 1 Analysis, OECD publishing

e-references

1. 国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) ～2006年調査結果の要約～」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf
2. OECD 東京センター「教育」
<http://www.OECDtokyo.org/theme/edu/2007/20071204PISA.html>
3. OECD Programme for International Student Assessment(PISA) 「PISA 2006」
http://www.OECD.org/pages/0,3417,en_32252351_32236191_1_1_1_1_1,00.html